

全国科学博物館協議会

全科協

vol.46 NO.1

News

平成28年1月1日発行 通巻第266号

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898

<http://jcs.jp>

JCSM

Japanese Council of Science Museums Newsletter

特集「産業遺産・近代化遺産と博物館」

Contents

P2 ▶ 特集 | P10 ▶ 海外博物館事情 | P12 ▶ 1月2月の特別展等 | P14 ▶ リニューアル情報 | P15 ▶ トピックス

産業遺産・近代化遺産と博物館

近年、日本の近代化を支えた産業遺産や近代化遺産の評価が高まり、文化財指定や世界文化遺産に登録がされるようになってきました。

明治政府は、海外から制度や設備、技術、人材などを導入し、世界に追いつく事を目指しました。産業・技術・科学では、最先端の情報や設備・インフラの導入と、それら持続可能な維持に加え進化発展のために必要な人材育成や試験研究機関の設置などの様々な活動が含まれます。

つまり現在我々が享受する社会基盤は、この頃海外からもたらされ、日本において使いやすいように手を加えられたものが基本となっています。

今回の特集記事では、日本の近代化に大きく貢献した産業遺産の中でも世界文化遺産に指定された遺産にフォーカスし、遺産に関連する博物館施設を紹介します。現在日本は、文化・文化財を観光の核とする事業に力を入れていますが、文化財を充分保存した上で活用（観光）を考えなければなりません。その中で産業遺産には、前例のない保存と活用の両立の難しい取り組みが必要です。

そこで、世界文化遺産に指定された産業遺産と博物館施設の関係を中心に、現在までの様々な活動と今後の世界文化遺産との取り組みを、紹介頂きます。

(本誌編集委員 沓名 貴彦)

鉄の歴史館と世界文化遺産登録

釜石市立鉄の歴史館 岡崎 貞夫

1 はじめに

釜石市は、岩手県の東南部、三陸復興国立公園のほぼ中央部に位置し、古くから製鉄業と水産業のまちとして発展してきました。製鉄業は、1857年(安政4年)12月1日、盛岡藩士「大島高任」が我が国で初めて釜石の地において洋式高炉を用いて鉄鉱石による製錬に成功したことから始まり、幾多の変遷を経ながら今日の新日鐵住金・釜石製鐵所に引き継がれ、鉄産業の中心的存在として日本の産業発展に大きく貢献してきました。

そのような中、「鉄と魚のまち」から「観光のまち」への転換のため、昭和60年7月に「鉄の歴史館」はオープンしました。

当館のコンセプトは、近代製鉄の父といわれる大島高任の功績や釜石における鉄づくりの歴史を総合的に紹介することであり、観光客など一般来館者のもとより、研究者の方々にも応えられる施設となっています。平成6年4月に橋野鉄鉱山や釜石製鐵所の歴史に関する資料などを充実させてリニューアル・オープンし、現在の施設規模になりました。



釜石市立鉄の歴史館

2 大島高任の業績

大島高任は、文化9年(1826年)5月11日、盛岡藩の侍医大島周意の嫡子として盛岡に生まれ、17歳から江戸や長崎、大坂などに出て、西洋の兵学や砲術を体得し、採鉱や冶金技術などを学びました。また、オランダ人ヒュゲーニン著の「ロイク王立鉄製大砲製造所における鑄造法」の翻訳を行いました。

その能力や知識を見込まれ、水戸藩に雇われて那珂湊反射炉の建設に従事し、西洋列強に対抗するための大砲を鑄造しました。しかし、従来の砂鉄原料のたたら銑では亀裂が入りやすかったことから、より高品質な鉄を造るべく、安政4年、盛岡藩甲子村大橋(現：釜石市西部)に洋式高炉を建設し、大橋産の鉄鉱石を原料とした出銑に成功しました。

情報が少なく、社会・交通インフラも脆弱だった状況で西洋の概要書の参考書をたよりに成し遂げたこの業績は特筆すべきものであり、日本の近代製鉄が発展するさきがけとして大きく評価されています。このため、初出銑の日、12月1日は、日本鉄鋼連盟により「鉄の記念日」とされています。



大島高任像(釜石駅前)

3 世界文化遺産に登録

2015年7月、橋野鉄鉱山（橋野高炉跡及び関連遺跡）を含む「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が、世界文化遺産に登録されました。

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」は、幕末から明治期の重工業分野における急速な産業化の道程を時間軸に沿って証言する8エリア23資産によって構成されています。

日本が非西洋地域で初めて、そしてわずか半世紀という極めて短時間のうちに産業国家としての地位を確立したことは、奇跡とも呼ばれる世界史的意義を持つ出来事であり、技術や産業、社会経済に関わる世界の歴史的発展において特筆すべきまれな事象であります。

構成する23資産は、全国8県11市に分散していますが、群として全体で世界遺産価値を持つ、一つの資産（いわゆるシリアルノミネーション）として登録されました。

これらのうち橋野鉄鉱山は、当市北西部の山中にあり、3基の高炉場跡、鉄鉱石の採掘場跡、採掘場から高炉までの運搬路跡の3つの遺跡を総称しています。

橋野高炉は、安政5年から盛岡藩が大島高任の願いを受けて建設したものであり、高炉の外壁である石組みに石垣築造の技術を導入したと思われる、また、古来より鍛冶で使用していた箱型フィゴの仕組みも応用しています。後の官営八幡製鉄所の銑鋼一貫体制の成功に至るまでの製鉄、製鋼分野の発展過程は、釜石での試行錯誤から生まれたものであることから、その代表的かつ完全性のある資産である橋野鉄鉱山が今回の構成資産に含まれています。

橋野の高炉場跡では、南から一番、二番、三番と3基の高炉、主に送風用のフィゴの動力となる水車に水を引くための水路、管理事務所に当たる御日払所等が遺構として確認できます。鉄鉱石採掘場跡は高炉場の南南西約2.6kmの沢沿い上流に位置し、露天掘り跡や石垣等が残っており、運搬路跡は高炉跡と採掘場跡の間の林道に沿って部分的に残っています。（採掘場跡と運搬路跡は非公開（年に1、2回一般公開）です。）

大島高任が釜石地方で高炉による製鉄を始めた理由としては、①良質な鉄鉱石が豊富であること、②燃料の木炭を生産できる森林が豊かであること、③高炉に風を送る水車の動力となる川があること、などが挙げられます。なにより、古来、「たたら製鉄」に携わる多くの人材がいたことも大きな要因であると考えられます。

最盛期には橋野鉄鉱山で約1,000人が働いていました。さらに、釜石地方には最大13基の高炉が建設され、当時としては国内最大級といっても過言ではない工業地帯が形成されました。



橋野高炉跡

4 世界文化遺産登録と鉄の歴史館

鉄の歴史館は、橋野鉄鉱山に関わるものとして、三番高炉を原寸大（炉の高さ7m）で再現した模型で当時の鉄づくりの様子などを紹介する「総合演出シアター」、橋野・大橋の製鉄関連施設とそこで働く人びとを描いた絵巻物「両鉄鑛山御山内並高爐之図（複製）」、橋野高炉場付近を復元した「橋野高炉場盤景（模型）」、高炉に風を送る装置である「フィゴ」などを展示しています。特に、総合演出シアターは、音と光と映像による迫力ある演出により、来館者に大変ご好評を頂いています。また、1860年頃描かれた「両鉄鑛山御山内並高爐之図（複製）」は岩手県有形文化財となっており、この絵巻物と橋野鉄鉱山の遺跡があることが、世界文化遺産登録の大きな要因となりました。

世界文化遺産登録後、鉄の歴史館の入館者数は増加しており、2015年4月から10月の累計で前年同期比5,896人の増（65.1%増）となっていますが、世界文化遺産登録を十分反映させた展示内容となっていないという課題があります。他にも、橋野鉄鉱山を紹介する橋野鉄鉱山インフォメーションセンターや郷土資料館など市内関連施設との連携や多くの市民、観光客に世界文化遺産登録の価値を理解していただくための取組みなど、様々な課題に直面しています。

このため、世界文化遺産登録を踏まえた総合演出シアターの上映内容の見直し、絵巻物（前述）全部を閲覧できるようにするタッチパネル化、キャプションの多言語化検討などの作業を進めており、今春にはリニューアルし、更に満足していただける内容を提供できるものと期待しております。

また、橋野鉄鉱山をより理解していただくため、橋野鉄鉱山を紹介する写真・模型展、橋野高炉製鉄を鍛えた刀剣の展示などのイベントを開催しておりますし、当館と橋野鉄

鉱山インフォメーションセンターを訪れた来館者への優待企画を関係部署と協議中です。

今後とも、世界文化遺産登録を一過性のブームとしないため、関連するイベントを数多く開催して情報発信に努めると

世界遺産・富岡製糸場の保存と活用 — 課題と取組み — 富岡市・富岡製糸場保全課 岡野 雅枝

はじめに

平成 26 年 6 月、「富岡製糸場と絹産業遺産群」がユネスコ「世界遺産一覧表」に記載され、富岡製糸場は中心的構成資産として世界遺産となった。富岡製糸場の世界遺産登録は、近代産業遺産としては日本で最初の事例である。同年 12 月には富岡製糸場の主要建造物である繰糸所と東西 2 棟の置繭所が国宝に指定され、これも近代産業遺産としては最初の国宝である。富岡製糸場の世界遺産登録および国宝指定は、日本の近代産業遺産の保護においてエポックメイキングな出来事であるといつてよい。

富岡製糸場は、周知のとおり、明治政府によって明治 5 年に創設された模範製糸工場で、幕末の開港以降、需要が高まった輸出用の高品質の生糸を大量生産できる本格的な器械製糸工場として、西洋の先進技術を国内に伝播させる役割を担った。

富岡製糸場は明治 26 年に民営化され、経営の変遷があったものの 115 年間一貫して製糸工場として操業を続け、昭和 62 年に日本の製糸業の衰退と共に操業を停止した。しかし幸いなことに、閉場後も最後の経営者であった片倉工業株式会社が管理を続けてくれたおかげで建造物群はほぼ保存されたまま、平成 17 年に富岡市へ移管された。

その後、市は一般公開を開始し、世界遺産登録プロジェ

クトを進める一方で文化財指定に向けて調査を行い、敷地全体が国の史跡に、また 7 棟 1 基 1 所の建造物が国の重要文化財に指定された。

登録プロジェクトは冒頭で述べたとおり実を結び、そして富岡製糸場は平成 26 年度、前年度 4 倍強の 130 万人を超える来場者を迎えることとなった。

富岡製糸場は平成 26 年度、前年度 4 倍強の 130 万人を超える来場者を迎えることとなった。

保存・活用の現状と運営上の取組み

富岡製糸場には、細分すると 100 棟を超える建造物があり、そのほとんどが文化財建造物であるため、全体の保存修理及び整備活用工事が完了するには少なくとも 30 年ほどかかる予定である。現在、敷地と建物の一部を一般公開しているものの、来場者の安全を図りながらの暫定的な公開となっている。



富岡製糸場案内 Map

内部を公開しているのは東置繭所と繰糸所の 2 棟で、また見学して回れる敷地も限られている（富岡製糸場案内 Map 参照）。来場者からは公開範囲の拡大について多く希望が寄せられているが、旧工場のため立入りが危険な場所もあり、

ここを動かす空間をつくりあげるために。
調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

株式会社丹青社 2015年9月 本社を移転しました
〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19階
TEL | 03-6455-8100(代表) URL | www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆
Fossils, Minerals & Rocks TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
株式会社東京サイエンス http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail: info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
Practical Specimens for Study of Earth Science

また劣化が進んでいる構造物も少なくないため、整備が済んでない状況では安全管理上、制限せざるを得ない。

富岡製糸場の維持管理業務は、市の担当部署が場内に管理事務所を置いて行っている。昨年度までは、その職員が通常業務を行いながら来場者の対応も行ってきたが、今年度から、入場券販売、団体予約の受付、ガイドツアーの催行、総合案内等々の来場者対応については外部へ業務委託するようになり、専任スタッフが対応に当たるようになった。また、広い場内の各所に監視員及び警備員を配置して、来場者の安全確保に努めている。

苦情の多かったトイレについては整備を進め、また、入場券は周辺の観光案内所でも買えるようにして、スムーズに入場できるようにした。場内の案内・説明看板についても状況を見ながら追加・更新し、また、複数言語による表示も順次進めている。

一方で、今後の保存修理・整備活用工事に多額の費用が見込まれるため、平成27年度より入場料(大人)をこれまでの倍の1,000円に値上げした。しかし値上げ後も来場者数の減少は今のところ見られず、今秋の観光シーズンは9月から11月の3か月間で40万人余りの来場者を迎えた。

入場料値上げ後の対応として、限られた条件の中で公開できるところは少しでも公開できるように取り組んでいる。平成28年早々には、現在保存修理工事中の西置繭所に隣接して、工事現場を見学できる仮設施設がオープン予定である。また、現在1階のみを公開している東置繭所については、2階の一部を暫定的に公開する準備を進めている。

富岡製糸場の価値を遺し伝えるために

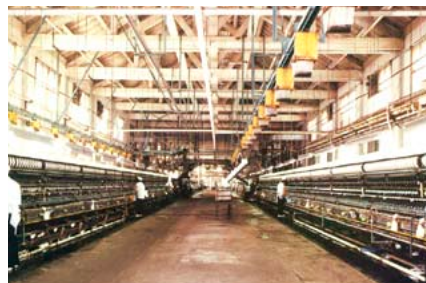
富岡製糸場の文化財としての価値は、創業当初期の主要建造物と敷地がほぼそのまま良好な状態で残ることが一つ挙げられるが、産業遺産としての観点から、日本の近代製糸の始まりから到達点までの技術革新の象徴であり、その歴史を遺し伝える場として貴重であり価値がある。また明治

から昭和にかけての労働者の生活空間がよく残っていることも評価が高い。

このような富岡製糸場の価値と魅力を来場者へ伝えるために必要な展示解説の機能は、今後、各建物を本格的に保存修理する際に併せて整備をしていく予定である。

現在は、東置繭所内で、パネル展示による総合的ガイダンスと20分ほどの映像による解説を行っている。また、解説員が有料で40分ほどのガイドツアーを行っている。そのほか、5言語で対応できる音声ガイド機の貸出や、来場者がスマートフォンを所持している場合は無料で音声ガイドを利用できるシステムも提供している。

140年余りと歴史も浅く、近代の産業施設であるためか、アンケート結果などをみると、一般の来場者にその価値を理解していただくのはなかなか難しいところである。将来的には製糸システムの動態展示も視野に入れつつ、製糸工程や製糸技術の変遷について分かりやすく、楽しんでいただきながら理解してもらえるような展示解説をしていきたいと考えている。さらに、寄宿舎や社宅群、診療所、食堂、教育施設といった生活空間についても、有効に活用もしながら労働者の暮らしについて伝えていきたい。



操業していた頃の繰糸所内部

富岡市が所有・管理する施設ではあるものの、世界遺産・国宝であることから、その価値は国際コミュニティに共有されるべきものである。富岡製糸場の歴史的・学術的価値を少しも損ねることのないよう、市が設置している保存修理と整備活用のための委員会でも十分な検討を行い、また文化庁

Panasonic

Core Products
Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution
マーケティング・セールス
システムインテグレーション
設置・施工
保守・メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

panasonic

パナソニックだから、可能なソリューションがある。

パナソニック システムネットワークス株式会社 システムソリューションズジャパンカンパニー
詳しくはホームページで panasonic.co.jp/avc/psn/ssj/

— ご希望の恐竜・化石・動物・人類の標本及び模型を探しご案内いたします —

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長—10m

株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8
TEL:03-5927-8356 / FAX:03-5927-8357
e-mail: gsc@shibayama.co.jp
<http://www.shibayama.co.jp>

と協議しながら、富岡製糸場の保存修理・整備活用の具体的な内容は決定される。

一方で、保存の意義を一般に共感してもらうためには、市民はもとより多くの人々に来場してもらい富岡製糸場の価値と歴史を楽しみながら理解してもらえるような整備活用を積

極的に行うことも必要である。価値を保存しつつバランスのとれた整備活用をどう行っていくのか、大きな課題である。

富岡製糸場が近代産業遺産の保存活用の先進事例として内外から認められるよう、関係者一同、知恵を出し合っ取り組みを続けたい。

世界遺産石見銀山遺跡の現状と課題

石見銀山資料館 仲野 義文

はじめに

石見銀山資料館は島根県の中央部に位置する大田市大森町に所在する。石見銀山に関する資料を収集・展示・保存することを目的に1976年に設立された民間の資料館である。建物は1902年築の旧邇摩郡役所を利用したもので、それ自体が貴重な歴史資料である。



資料館の外観

当館のある大森町はかつて日本有数の銀鉱山であった石見銀山の所在地で、鉱山遺跡とその関連する遺跡は2007年7月、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の名称で世界遺産リストに登録された。国内では14番目、またアジアの鉱山遺跡では初の登録となった。登録から8年が過ぎた現在、来訪者数の動向を含め遺跡を取り巻く環境は変化し、と同時にその活用や保全などの問題や課題も顕在化してきた。本報では世界遺産の中にある資料館という観点から遺跡の

現状と問題、そして今後の取り組みなどについて報告する。

遺跡の概要

石見銀山遺跡はコアゾーン529㍍、バッファゾーン3,663㍍の大規模遺跡である。図1が示すように14の資産からなり、これを①16世紀前半から20世紀前半にかけて操業された銀鉱山の開発の諸様相を良好に残す鉱山本体とそれによって発達した鉱山町および支配関連の山城跡、②銀山から二つの港湾に向けてつながる銀・銀鉱石と諸物資の輸送路、③石見銀山で産出した銀・銀鉱石の積み出しに利用された二つの港湾と、隣接して発達した港町及び港湾集落、の三分野に分け、これらが生産、支配、信仰、輸送など鉱山運営にかかわるシステムの総体を示す構成となっている。このうち遺跡の中核をなす銀鉱山跡は、16世紀前半から400年間にわたる鉱山活動の痕跡を示す遺構が良好に残るなど、鉱山の歴史の変遷を考える貴重な遺跡である。

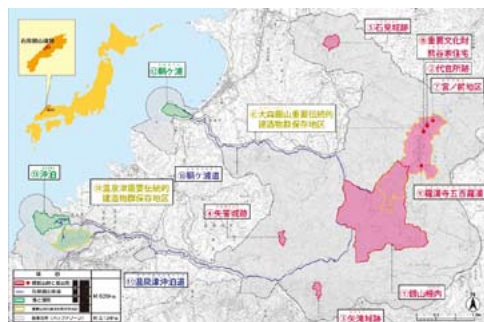


図1：石見銀山遺跡の範囲

包み込まれるような映像体験。

Media Globe Σ

「Media Globe Σ」は、最新の家庭用4Kテレビの、更に約4倍の高精細映像をお楽しみいただける、「8K」の投射解像度を持つ最新プロジェクタを搭載し、コニカミノルタの持つ先進の光学技術との融合により、高精細・高臨場感溢れる映像を、スクリーン全天に映し出します。



コニカミノルタ プラネタリウム株式会社 <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

オムロンのセンサーを使って

人数 性別年代 滞留時間 を数値化

展示内容、レイアウト変更の検討など企画・運営に役立つ!

ヒューマンビジョンコンボ Bluetooth LE モデル

コンパクトな手のひらサイズ

NEW

お手軽! 客層分析 検索

オムロン株式会社 アプリケーションオリエンテッド事業部
お問い合わせ okao-vision@omm.ncl.omron.co.jp

求められる見せ方の工夫

石見銀山遺跡の来訪者は登録前には30万人程度であったが、登録直後では80万人に達し、当館の入館者も前年度の5倍15万人を記録した。その後漸次減少し2014年にはピーク時の約5割43万人となっている。来訪者数の減少は、そのまま遺跡の価値や評価に繋がるものではないが、ただ登録直後から指摘されている「価値の分かり難い遺跡」という点については検討の必要があろう。

石見銀山遺跡の場合、他の世界遺産のように象徴的な建造物や構造物はなく、鉱山遺跡としても堅坑や機械工場、発電所などの近代遺構も少ない。鉱山活動を視覚的に示すものでは岩盤に開いた坑道跡があるのみで、その多くは考古学遺跡として地下に埋蔵された状態にある。これ自体は石見銀山遺跡が有する世界遺産としての顕著な普遍的価値の1つではあるが、専門的な知識や情報を持たない一般来訪者にとってはそこから往時の姿をイメージすることは容易ではない。しかも、鉱業を意味する英語の「mining」が鉱石の採掘を意味するように、活動の中心は地下で展開されており、その意味からすれば鉱山遺跡の大部分は地下であるといつてよい。むしろ来訪者が石見銀山で目にする風景は鉱山の一部に過ぎず、そうした鉱山特有の空間構成のイメージを今後どのように伝えるかが「分かり難さ」を解消する方策ともいえる。

また来訪者の鉱業に対する理解が不足している点もこの一因にある。農業や漁業のように身近ではなく、ともすれば地中を掘っただけで銀が出来ると思っている人も少なくない。そのため石見銀山遺跡を理解するにあたり、まず鉱業への理解をいかに深めていくかが重要な視点となろう。

石見銀山資料館ではこの点を踏まえ、近世期の鉱業を理解するためのキーワードとして資源・経営・労務・技術・政策・コミュニティを挙げ体系的な展示を行っている。また実際の展示にあたっては鉱物標本や歴史資料などの「モノ」のみ



■ NOMURA <http://www.nomurakougei.co.jp/>

Prosperity Partner
NOMURA
世界に、歓びと感動を

株式会社 乃村工藝社
本社：東京都港区台場2-3-4 TEL：03-5962-1171(代表)

でなく、現地の遺跡を含めて構成を考えている。当館にとっては現地の遺跡もまた重要な博物館資料であり、資料と遺跡を結びつけることが結果的には来訪者の遺跡に対する理解を深めるのに有効である。そこに遺跡の中にある博物館の強みがあるものと考えている。



石見銀山学習の様子

石見銀山学習の可能性

世界遺産を有する自治体の多くは、遺産の担い手や地域に誇りをもつ子どもを育てようと学校教育に積極的に取り入れ、成果を世界遺産学習サミットでの発表を通じて連携を深めている。大田市においても石見銀山の学習を通じて地域に誇りをもつ子どもを育てようと、市内の小中学校を対象に石見銀山学習を推進し、それに必要な経費については石見銀山基金から各学校に対し1校当たり30万円を上限とする助成事業を実施している。主に小学校では6年生、中学校では1年生を対象に総合的な学習の時間で行われている。当館の学芸員もしばしば授業の講師として招かれることがあり、当館においても石見銀山学習は教育普及活動の重要な柱として位置付けている。

郷土への愛着や誇りは、世界遺産登録が地域にもたらす最大の効果であり、このキーワードは地域活性化の大きな原動力といえる。とりわ石見銀山遺跡の顕著な普遍的価値の1つである文化的景観の構成要素のなかには限界集落も存在する。これらの集落は銀山の開発によって成立・発展し、鉱山の閉山後はその機能や役割を替え、現在でも地域住民の生活の場となっており、それ自体が「生きている遺跡」といえる。しかし、こうした集落もまた少子高齢化の影響に曝されており、近い将来その維持すら困難な状況に陥ることが指摘されている。集落の消滅はもとより文化的景観としての価値を損なうものであり、遺産の保全上憂慮すべき事態といえる。石見銀山遺跡にあつては地域の活性化は遺跡の保全そのものであり、その意味で郷土の誇りに繋がる石見銀山学習は期待できる取組みとなろう。

この学習はまたそれを入り口として、現代社会が抱える様々な課題を考える機会ともなる。そのため当館においても

この学習をユネスコが推進するESD（持続可能な開発のための教育）へと発展させるため、現在学習プログラムの作成に向けた研究を始めている。

今後の取組み

最後に調査研究の課題と今後の取組みについて述べておきたい。石見銀山遺跡は鉱山という産業遺産であるが、世界遺産登録では文化的景観での登録となった。これは欧米の産業遺産の専門家の意見が強く反映されたもので、このような背景には日本を含むアジアにおける鉱山遺跡研究の遅れがあることは否めない。事実、世界遺産登録時ユネスコは、同一圏域内の鉱山遺跡との比較研究を要請しており、現在

高根県教育委員会が中心となって「東アジアの鉱山比較研究」というテーマで調査研究を進めている。

しかし、佐渡金銀山や多田銀銅山などの一部の事例を除けば石見銀山と同レベルの調査研究を実施している鉱山遺跡はなく、比較検討する際の十分な資料や情報が得られないのが実態である。また、一自治体が他の自治体や海外に乗り込んで調査することにも限界がある。その問題を解消するには、大学や国立博物館などの研究機関との共同研究や、鉱山遺跡を抱える自治体間の連携と交流が必要といえ、当館も鉱山博物館同士の連携を今後一層進めていきたいと考えている。

「産業革命遺産」展示の可能性

北九州市立自然史・歴史博物館 日比野利信

本年7月5日「明治日本の産業革命遺産－製鉄・製鋼、造船、石炭産業－」がユネスコの「世界文化遺産」に登録された。8エリア・23構成資産から成り、八幡製鐵所旧本事務所・旧鍛冶工場・修繕工場（北九州市）と遠賀川水源ポンプ室（中間市）も含まれる。北九州市初の世界文化遺産である。

しかし4施設はすべて新日鐵住金株式会社所有であり、現役で稼働中の施設もあって、立入禁止・非公開である。そこで北九州市では同社の協力のもと、4月1日より「官営八幡製鐵所旧本事務所眺望スペース」を開設した。また8月末まで眺望スペースと東田第一高炉など周辺施設を周遊するバスを運行した。8月15日～10月31日の土日祝日には1日4回「官営八幡製鐵所関連施設見学公認バスツアー」を実施した。さらに「世界文化遺産登録記念展」として、北九州市立産業技術継承センター（KIGS）で「八幡鐵ものがたり」を、北九州市立自然史・歴史博物館で「世界遺産のまち 北九州と明治日本の産業革命」を開催している。



展示会場の様子

KIGSでは八幡製鐵所開業の経緯やその後の歴史を詳しく紹介している。一方博物館ではKIGSと連携しつつ差異化を図り、収蔵品に即して、①「安川・松本家と北九州－製鐵所誘致の立役者安川敬一郎の足跡」②「山本作兵衛の炭鉱記録画－製鉄を支えた炭鉱の記憶」③「北九州の都市発展と近代化遺産」という3つのテーマで展示を構成し、「明治日本の産業革命」の中に北九州の近代史を位置づけた。2つの企画展を合わせて、製鐵所の足跡と北九州の都市発展を関連づけ、総合的に考えることができる。

②について補足する。山本作兵衛氏（1892～1984）は長年筑豊の炭鉱で働き、閉山・引退の後、消えゆくヤマの記憶を次世代に伝えるため、膨大な数の炭鉱記録画を制作した。2011年田川市などが所蔵する炭鉱記録画589点と関連資料108点が日本初のユネスコ世界記憶遺産に登録された。「明治日本」に筑豊は入っていないが、それは長崎や三池に比べて資産としての「残り」が悪く除外されたからである。代わりに「山本作兵衛」が世界記憶遺産に推薦・登録されたわけである。「明治日本」と「山本作兵衛」は一心同体である。今回の登録決定によって九州と福岡県は同一テーマについて世界文化遺産と世界記憶遺産の両方を有する希少な地域となった。博物館の前身である北九州市立歴史博物館の開館に際して委嘱制作された2枚の作品は彼の最大の炭鉱記録画として貴重である。



炭鉱記録画お披露目式(1975年11月3日)
左が山本作兵衛氏

眺望スペースは当初写真撮影が禁止されていたが緩和された。しかし周遊バスは9月以降運行されていない。見学ツアーは今後も行われるだろうが、如何せん不定期である。記念展はイノベーションギャラリー(KIGS)が12月20日、博物館が来年4月6日で終了する。KIGSは場所を替え、内容を集約した展示を継続する。博物館は常設展の「明治時代以降の北九州」を全面的に改装、「世界文化遺産紹介コーナー(仮称)」を設置する予定である。しかしそれだけで十分なわけでは決していない。

構成資産が原則非公開であればなおのこと、一定の公開を含むアクセスを保障しつつ、情報を発信する拠点施設が不可欠である。製鐵所に即して考えれば、少なくとも当面は博物館とKIGSが拠点施設として整備・充実されるべきである。特に博物館は北九州市の歴史/総合博物館として、地域の歴史の中に八幡製鐵所を位置づけ、製鐵所と合わせて地域の歴史を総合的に示していく責務がある。また拠点施設を出発点として、眺望スペースと東田第一高炉を見学し、製鐵のまち八幡、さらに北九州市各地の近代化遺産を回る「周遊性」の構築も要請される。

博物館が拠点施設としての使命を果たしていく際、何よりも関連資料の調査・研究・収集・保存・活用が大きな課題となる。八幡製鐵所関連資料は質量とも豊富で、特に官営期の資料はきわめて貴重である。会社ではガラス乾板を高精度のデジタルカメラで複写する作業を進めてきた。ほかに文書資料やモノ資料も膨大にある。今後は会社に任せたまにするのではなく、文化財指定も含めて、保存・活用の道筋を追求していく必要がある。今後の展示は関連資料を基礎に、研究成果を反映させて構築されなければならない。

今回の「明治日本の産業革命遺産」は各構成資産を1つのストーリーでまとめる「シリアルノミネーション」の方法を採用した点に最大の特徴がある。言わば「明治日本」は1つのチームである。「明治日本」に関わる近代化遺産は北九州市内にも全国にもまだまだたくさんある。今回登録され

た8エリア23構成資産はチーム「明治日本」の「代表選手」と言うべきで、他のエリアや産業遺産を含めてチームの「層の厚さ」を追求していくべきだろう。それは展示ではどのように可能だろうか？

「明治日本」の世界文化遺産としての「顕著で普遍的な価値」とは何か。「日本が非西洋諸国で初めて産業革命の波を受容し、わずか50年余りで植民地にならずして自らの手で産業化を成就した」ことが「世界史における類い稀な局面」と評価されたと説明されている。具体的には、1850年代から1910年まで、試行錯誤に始まり、西洋技術の導入を経て、国内の人材を育成し、産業化を完成させるという3段階、また製鉄・製鋼、造船、石炭産業という3産業から成る。その中で八幡製鐵所は最終段階つまり産業化の完成を象徴し、その後の工業立国の土台となった施設と位置づけられるのである。

したがって、第1に製鉄・製鋼に即して、萩・鹿児島・韭山などに始まり、釜石を経て八幡へといたる道筋を明示すべきである。第2に八幡製鐵所誕生の背景としての筑豊を重視しつつ、石炭に関わって三池や長崎(など)につなげていくという道筋である。第3に「明治日本の産業革命」と八幡製鐵所開業により北九州が工業都市・港湾都市として発展していった地域史・都市史の道筋である。第4に産業革命はそれだけが単独に進行するのではなく、政治革命=明治維新が並行する日本の近代化の道筋である。私たちは明治の北九州を中心にさまざまな「道筋」を明らかにしていく必要がある。

そのためには、時間的には1850年代から1910年までに限らず江戸時代以降現在までを対象として、空間的には8エリアはもとより日本国内だけでなく世界史の中で、政治・産業両面から日本-北九州の近代史をひもといていくことが求められる。「スケールが大きすぎて無理」というなかれ。相手は「世界遺産」なのである。

開催中の登録記念展終了後は常設展「明治時代以降の北九州」をリニューアルし、世界文化遺産紹介コーナーとしての意味を持たせて再構築する予定である。展示の規模は小さいが、上述した視点は保持したいと考える。

同時に提案したい。「明治日本」は8エリアに分散しており、展示も各エリアの関連施設で行われているだけである。前述した「道筋」を展示で示すには、展示にもシリアルノミネーションの手法を!関連施設共同での「巡回展」の開催である。目指すは「上野」?である。



■ 新設館

ニューヨークで、気候変動の博物館が2021年に開館へ

2012年10月末にハリケーン・サンディがアメリカ東部に上陸し、ニューヨークに大規模な都市水害を引き起こした。その被害規模は歴史的に見ても甚大で、多くの被災者を出した。爾来、被害を受けたニューヨークで官民挙げて想定外の災害に備えて多くの対策を強化してきた。そのひとつとして、市民が中心となって、気候変動をテーマにした博物館の整備の取り組みがある。

新しい博物館「Climate Museum」は、気候変動を広く啓蒙する目的で、大気に放出される二酸化炭素から、地球の温暖化が原因となっている海面上昇までのテーマを扱うことになっている。ニューヨーク州に認可された非営利法人が設立母体となって活動を開始しており、長く環境問題と取り組んできた弁護士ミランダ・マシーが事務局長として設立計画を牽引している。またC40気候変動東京会議（2008年）で「気候変動と都市の食糧問題」について講演を行ったシンシア・ローゼンツヴァイク博士（米NASAゴダード宇宙科学研究所上級研究員）も理事として参加し活動を支えている。同館はローゼンツヴァイク氏をはじめ多くの科学者が協力しており、気候変動を積極的に研究しているコロンビア大学地球研究所も組織的な協力を提供している。また既にドイツの港湾都市ブレーマーハーフェンのウォーターフロントで開館した気候博物館（2009年6月27日開館）等とも密接な連携をもっている。建物はマンハッタン島あるいは隣接するブルックリン地区にあるウォーターフロントに設けられるようだ。開館予定は2021年。

Climate Museum, New York.

<http://www.climatemuseum.org/>

<http://www.historicalclimatology.com/interviews/a-conversation-with-miranda-massie>

<http://www.telegraph.co.uk/news/picturegalleries/worldnews/9644975/Hurricane-Sandy-pictures-50-dramatic-images-of-destruction.html?frame=2384026>

中東ドバイに、未来科学館が2017年に開館へ

アラブ首長国連邦ドバイには世界一高い超高層ビル「ブルジュ・ハリファ」（2009年10月1日完成）があるが、同国に総工費1億3,600万ドルの新しい科学館が、ドバイの金融街の近くに2017年の開館をめざして整備が進められている。新しい科学館「Museum of the Future」はその名の通り未来をテーマにした科学館である。同館は単に未来がどのような世界になるかを紹介するだけではなく、むしろ未来が現在の科学技術を使ってどのようにつくられて行くのかに主眼を置いている。常設展示の目玉は、ロボットが中心になっており、ロボットの進化とロボットを開発した技術者に光をあてたものが計画されている。

Museum of the Future, Dubai.

<http://motf.ae/>

英ブリストルに、航空博物館が2017年に開館へ

英ブリティッシュ・エアロスペース社はイギリス国内にあった航空機メーカー4社が統合して1977年4月29日に誕生したイギリスの国有航空宇宙企業である。この統合劇のひとつの源流だったブリストル飛行機（1910年創業）の本拠があったブリストルに、かつてのブリストル飛行機で製造された航空機の歴史を紹介する航空博物館「Bristol Aerospace Centre」が2017年夏に開館する。ブリストル飛行機は1910年の創業から1959年に英政府により他の航空機メーカーと合併するまで同国の主要な飛行機製造メーカーのひとつだった。同社の技術的伝承は、後に超音速旅客機「コンコルド」に完成を見た。目玉展示は、20番目に製造された最後の製造機（1979年4月20日初飛行）の静態保存展示である。総工費17,500,000ポンド。設立・運営団体は、ブリストル・エアロ・コレクション・トラスト。

Bristol Aerospace Centre, Bristol.

<http://www.bristolaero.org/>

ワルシャワに、ヴートゥカ博物館が2017年に開館へ

ロシア人に言わせると、ウォッカはロシアで誕生したことになるが、ポーランド人が同国でヴートゥカと呼ぶこの強い蒸留酒は、帝政ロシアの領土だった頃にポーランド

人の手によって、いまポーランドと呼ばれる地で誕生したのだと強く主張する。このヴェートッカのブランドのひとつであるズブロッカはポーランド東部の森に群生する牧草（和名：香茅）を漬け込んだものであり、日本でもカクテルで広く使われており、ファンが多い。

そのヴェートッカの製造を紹介した企業博物館「Muzeum Polskiej Wodki」が、ズブロッカ等のブランドを製造しているポーランドの酒造メーカー「ボルモス・ビャウイストク社」によって、2017年夏の開館をめざして整備が進められている。設置場所は、首都ワルシャワの北部にあるプラガ地区の同社コノセラ工場内。

Muzeum Polskiej Wodki, Warsaw.

<http://koneser.eu/inwestycja/>

カナダ・アルバータ州に、恐竜博物館が2015年に開館

カナダのアルバータ州では世界でも類を見ないほど多くの恐竜化石が見つかっており、今も地中に未発見の恐竜が眠っている。同州南部にあるロイヤル・ティレル古生物学博物館（1985年開館）は世界的に有名な恐竜博物館であるが、このほどアルバータ州中部に新たな恐竜博物館「フィリップ・J. カリー恐竜博物館」が2015年9月3日に開館した。

新しい博物館の名称は、カナダの著名な古生物学者のフィリップ・J. カリー博士（アルバータ大学）にちなんで命名された。常設展示は、多くの恐竜化石が発見された「パイストーン・クリークの骨層」（実物大レプリカ）、「デボン紀のアルバータ州」、「白亜紀のアルバータ州」と「今日のアルバータ州～原油と天然ガス～」によって構成されている。

Philip J. Currie Dinosaur Museum, Wembley.

<https://dinomuseum.ca/>

仏トゥールーズに、航空博物館が2015年に開館

エアバスは、ヨーロッパ（欧州連合の内の4カ国）の国際協同会社で、航空宇宙防衛企業のエアバス・グループ傘下にある航空機メーカーである。本社はフランス・トゥールーズにあり、その製造機は日本の空をも飛んでいる。

エアバスの本社があるトゥールーズに、同社における航空機製造の歴史を紹介する航空博物館「アエロスコピア」が2015年1月15日に開館した。同館は、トゥールーズ・ブラニャック空港に隣接した場所に設置されている。延べ床面積7,000㎡の展示館の目玉には、エアバス A300Bを始め、

イギリスと共同開発を行ったコンコルドや、「スーパー・グッピー」の愛称をもつエアバスB-377SG等の静態保存展示が見られる。

Aeroscopia, Toulouse.

<http://musee-aeroscopia.fr/>

■ リニューアル

米ジョンソン・エンド・ジョンソン社博物館が2016年にリニューアル開館

バンドエイドは、ジョンソン・エンド・ジョンソン社が製造・販売しているガーゼ付き絆創膏の商品名である。その製造開始は、1920年に遡ることができる。

製薬、医療機器その他のヘルスケア関連製品を取り扱う多国籍企業のジョンソン・エンド・ジョンソン社は、米国ニュージャージー州ニューブランズウィックに本社があり、本社ビル内にある歴史博物館が2016年の開館をめざしてリニューアル工事が進められている。新しい施設は、「新ジョンソン・エンド・ジョンソン博物館」と呼ばれることが決まっており、ジョンソン3兄弟が1886年に創業し、世界で初めて救急箱の販売（1888年）や、有名なベビーオイルなど、同社の125年を超える歴史を紹介することになっている。

The New Johnson & Johnson Museum, New Brunswick NJ.

<http://www.jnj.com/caring/patient-stories/museum>

カナダ科学技術博物館が、2017年にリニューアル開館

建物の老朽化が著しいカナダ科学技術博物館が全面リニューアルのために2014年9月から休館し、現在2017年夏の開館をめざしてリニューアル工事が進められている。新しい常設展示では、長く親しまれてきた蒸気機関車のダイナミックな展示が目玉展示として残り、新たに「生活の中のテクノロジー」や「知識の創造と活用」「資源の再利用」といった新しいコーナーが設けられることになっている。さらに子どもを対象とした展示コーナーも新たに設けられることになっている。

Canada Science and Technology Museum, Ottawa.

<http://cstmuseum.techno-science.ca/en/visit/museum-renewal.php>

1月2月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
札幌市青少年科学館	冬の特別展「ギガワンドフル!自由研究ラボ」	1月5日～1月17日
釧路市こども遊学館	冬休みイベント	1月4日～1月17日
牛の博物館	民俗芸能の動物たち	2月27日～5月8日
仙台市天文台	企画展示「地球外生命体にせまる!」	1月4日～3月31日
	武田康男 空のふしぎ写真展	1月4日～ 3月下旬(予定)
山形県立博物館	企画展「化石-太古の不思議な生き物たち-」	2月27日～5月8日
郡山市ふれあい科学館	第15回コンピュータグラフィックス展「宇宙で夏休み」	11月7日～1月11日
	ハワイエ企画展「宇宙から見た地球の絶景」	12月1日～2月28日
	スペースパーク企画展「錯覚美術館」	12月5日～1月11日
	科学技術の「美」パネル展	1月30日～2月28日
つくばエキスポセンター	科学技術の未来予測	9月17日～3月17日
	筑波山地域の「土」と「水」を知る -茨城県窯業指導所、筑波大学辻村研究室	12月5日～2月28日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	くらしの中の動物-嫌われものの本当のすがた-	10月1日～1月31日
	洞くつ探検-地下に広がるふしぎな世界-	2月20日～6月12日
栃木県立博物館	特別企画「名前に“日光”がつく動植物」	10月3日～1月24日
	テーマ展「あつまれ!自然好き:ポスター発表」	2月6日～3月6日
群馬県立自然史博物館	特別展「ぐんまの自然の「いま」を伝える」	1月16日～2月21日
川口市立科学館	特別展「もぐもぐ探検隊!～“くち”から“おしり”まで～」	12月12日～2月14日
埼玉県立自然の博物館	花粉が教えてくれること	1月30日～6月19日
千葉県立中央博物館	「水草 ふしぎがいっぱい、水辺のいろいろ」	10月31日～2月14日
	「千葉県新指定文化財展」	1月30日～2月28日
鴨川シーワールド	2016年 申年の生き物	12月19日～1月31日
国立科学博物館	「ワイン展-ぶどうから生まれた奇跡-」	10月31日～2月21日
	日本の科学者技術者展シリーズ第11回～ 「渋川春海と江戸時代の天文学者たち」	12月19日～3月6日
郵政博物館	-日本の美- 奥の細道切手原画展	1月23日～3月27日
多摩六都科学館	冬の特別企画展「オーロラと星座の世界～KAGAYA写真展」	12月5日～1月7日
はまぎんこども宇宙科学館	宇宙・科学による夢づくり事業 「電子顕微鏡展」	12月23日～1月11日
	宇宙・科学による夢づくり事業 特別企画「太陽と『ひので』展」(仮)	1月23日～1月31日
新江ノ島水族館	えのすいバックヤードツアー	12月25日～1月7日
	1月テーマ水槽「エビ・カニや海の生き物たちで祝うお正月」	12月26日～1月31日
	開運!魚みくじ～お年玉つきおみくじで運だめし～	1月1日～1月3日
立山カルデラ砂防博物館	写真展「素晴らしい自然を」	1月9日～2月10日
	巡回展「日本の生物多様性とその保全」	2月6日～3月27日
	特別展「映像でみる立山・立山カルデラ・砂防」	2月13日～3月6日

開催館	展覧会名	開催期間
岐阜県博物館	岐阜県博物館移動展「みのひだ 古生代の記憶」	12月11日～1月24日
	第36回日本自然科学写真協会写真展 「自然を楽しむ科学の眼 2015-2016」	2月6日～3月13日
大垣市スイトピアセンター 学習館	北岡明佳 錯視展	2月27日～4月10日
	日本国際ポスター美術館所蔵 ポスター展2016	2月27日～4月10日
東海大学海洋科学博物館	千支の生きもの(猿)	1月1日～1月11日
豊橋市自然史博物館	千支展「サル」	12月19日～1月17日
	企画展「ナキウサギ」	2月6日～3月6日
蒲郡市生命の海科学館	ミニ企画展「大陸移動説100年 ～時代の先を行きすぎた学説～」	11月7日～2月15日
	パネル展「ヒゲクジラ化石調査報告展」	11月21日～3月7日
トヨタ産業技術記念館	近代建築 ものづくりの挑戦(竹中大工道具館主催)	1月16日～4月3日
あいち健康の森健康科学総合センター健康科学館	冬の特別展示「ゴーストランド～ゴーストたちが教える体力アップのなぞ～」	12月19日～3月6日
真珠博物館	企画展「プライダグティアラ-進化する憧れのかたち-」	4月25日～3月27日
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター	資料室企画展「1.17のしるし イマ/ココから考える」	12月8日～2月28日
	減災グッズ展vol.4「パーソナリティ×減災」	12月15日～2月28日
姫路科学館	作品展「第30回未来を描く科学絵画展」*	1月29日～2月22日
明石市立天文科学館	特別展「2016年全国カレンダー展」	12月12日～1月17日
	特別展「明月記を世界に紹介した謎のアマチュア天文家「射場保昭」展」	1月23日～3月27日
鳥取県立博物館	企画展「鳥取の表現者 File.07 コウゲイノモリへ -探究する工芸家たち」	2月27日～3月21日
島根県立三瓶自然館	冬期企画展 自然を楽しむ科学の眼 第36回SSP展	12月20日～1月24日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「新着資料展2015」	11月21日～1月11日
	特別陳列「第23回しぜんしくらしき賞作品展」	1月17日～4月3日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別陳列「笠岡今昔物語」展	1月30日～4月5日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	企画展「ふしぎな免疫の世界～戦え!!からだ防衛軍～」	10月31日～3月6日
広島市江波山気象館	新春企画展「すべる!すべらない!摩擦の科学」(仮称)	1月23日～3月13日
大和ミュージアム 呉市海事歴史科学館	開館10周年・終戦70年記念特別企画展 「日米最後の戦艦展～戦艦大和とミズーリ～」	7月1日～5月8日
防府市青少年科学館	パネル展「深海のふしぎ」	1月30日～3月6日
北九州市立自然史・ 歴史博物館	世界文化遺産登録記念展 「世界遺産のまち 北九州と明治日本の産業革命」	7月4日～4月6日
	秋の特別展「医は仁術」	10月10日～1月11日
	歴史ばけつと企画展「変わるわたしたちの暮らし」	11月14日～4月3日
北九州イノベーション ギャラリー	企画展「2015年度グッドデザイン賞in北九州」	1月23日～4月10日
福岡県青少年科学館	巡回展「オーロラ -宇宙からの手紙」	2月6日～2月28日
佐賀県立宇宙科学館	有田焼創業400年記念 古くて新しい素材 セラミックス展	12月5日～2月14日
宮崎県総合博物館	特選!蔵出し展	1月16日～2月21日
宮崎科学技術館	恐竜ロボットファクトリー	2月6日～2月21日
鹿児島市立科学館	志賀美英鉱石コレクション「金属鉱物資源展」	1月6日～1月20日

※姫路科学館は大規模改修工事のため平成28年7月頃まで休館。その期間の作品展は館外会場にて開催。

リニューアル情報

ふくしま森の科学体験センター

[更新箇所] 再生可能エネルギーコーナー

[更新内容] 再生可能エネルギーの仕組みや現状について学ぶことができるタブレット端末を設置しました。

再生可能エネルギーに関するクイズのほか、発電の仕組みを説明する動画視聴、仮想学校に再生可能エネルギー機器を設置した際の投資回収などを模擬体験できます。

[公開日] 平成27年12月1日

[担当者] 北芝電気株式会社



つくばエキスポセンター

[更新箇所] ① 1階展示場 サイエンス・ワークス「江崎玲於奈賞・つくば賞・つくば奨励賞受賞者からのメッセージ」

②屋外展示場「かっしゃくん」

[更新内容] ①江崎玲於奈賞・つくば賞・つくば奨励賞の受賞者が直筆で記入した、青少年に向けたメッセージを約50枚閲覧できるほか、江崎玲於奈氏直筆のメッセージも展示しています。過去の受賞者のメッセージを閲覧できるアーカイブPCを併設しています。

②定滑車・動滑車・複滑車の原理と、2人以上で滑車を使った綱引きを体験することができます。実際に綱を強く引いて、それぞれの滑車の原理を楽しく学べます。

[公開日] ①平成27年9月13日

②平成27年9月19日



はまぎん こども宇宙科学館

[更新箇所] 4F 宇宙発見室

①「ビーコロ®」②ワークショップスペース

[更新内容] ①仕掛けが連動して動いていく装置で、身近にあるビー玉を用いて作られた展示です。

②「ビーコロ®」を紹介し、カプセルに鉄球を入れて斜面を転がすと不思議な動きをする「コロピコ虫®」の工作等を行います。

[更新面積] 70.84㎡

[公開日] 平成27年11月1日

[準備期間] 平成27年10月18日～10月31日

[担当者] 株式会社乃村工藝社





ムササビの博物館訪問、増えるかな？



当館にやって来たムササビ。
朝、寝ぼけ眼で目が完全に開いていません。

当館は、観光地として有名な長瀨町の「岩畳」近くにあります。恵まれた自然環境に立地し、目の前にはムササビが生息する荒川河畔林があります。調査と目撃により、ムササビは2012年に整備された館庭の「カエデの森」にもやってくるようになりました。当館では安全にムササビの夜間観察会が開催できるよう、2015年秋、構内のメタセコイアに巣箱をかけました。まだ幼い「カエデの森」ですが、木々が大きく育つ頃には、ムササビが頻繁にやってくることを楽しみにしています。



次回執筆者は「那須塩原市那須野が原博物館」の近藤慧氏です。

平成27年度第2回理事会・総会および 第23回研究発表大会の開催

と き：平成28年2月25日(木)・26日(金)

と ころ：富山市科学博物館

2月に平成27年度第2回理事会・総会を開催します。1日目には理事会・総会と、東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構の鈴木洋一郎先生の記念講演を予定しております。

2日目には第23回研究発表大会を開催します。今回も多様な加盟館園から口頭発表者、ポスター発表者が集まり、それぞれの館で行われている取り組みなどを発表していただきます。この機会を情報収集、情報発信の場として活用していただけますと幸いです。

お忙しいとは思いますが、皆様のご参加をよろしく願いたします。

※詳細につきましては、全科協ホームページをご確認下さい。

ASTC 年次総会 2015 報告

*ASTC (Association of Science - Technology Centers : 科学館協議会)

ASTCの2015年次総会が、10月17日(土)から20日(火)の4日間、カナダ・ケベック州のモントリオールにて開催され、北米の科学館や博物館等を中心に世界中から1,700名以上が参加しました。

デューク大学のAnnick Desjardins氏による基調講演や、教育・学習、展示、運営など様々なテーマに基づくセッションが100以上行われたほか、科学の普及啓発に大きな功績のあった人物、機関に対する表彰等も行われました。

最終日は、大会主催館であるモントリオールサイエンスセンターの施設見学があり、職員によるガイドツアーにおいては、参加者から展示に関する質問や自館展示との比較についてなど積極的な意見が飛び交いました。

(国立科学博物館 小林 朝子)



会場：モントリオール国際会議場



開会式



セッションの様子



モントリオールサイエンスセンター施設見学



展示見本市の会場

次回は、米国フロリダ州タンパにて2016年9月24日(土)～27日(火)開催予定です。
<http://www.astc.org/conference/>



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

大島 光春(神奈川県立生命の星地球博物館主任学芸員)
沓名 貴彦(国立科学博物館理工学研究部研究員)
佐久間大輔(大阪市立自然史博物館学芸課主任学芸員)
西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団
科学技術館運営部)
中井 紗織(国立研究開発法人科学技術振興機構
理数学習推進部能力伸長グループ)
畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)
平濱美紀子(ディスカバーパーク焼津事業係長)
中山 由紀(国立科学博物館事業推進部連携協力課長)

全科協事務局

国立科学博物館 事業推進部 連携協力課
(担当:村上、飯岡、中島)
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898
info@jcsm.jp
発行日 平成 28 年 1 月 1 日
発行 全国科学博物館協議会 ©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印刷 株式会社セイコー社